

## 筑波大学附属坂戸高等学校のユネスコスクール実践史：総合学科で育成するグローバル人材像

著者	今野 良祐
著者別名	Konno Ryosuke
雑誌名	研究紀要
巻	52
ページ	90-96
発行年	2015-09
その他のタイトル	A History of the UNESCO ASPnet School in Senior High School at Sakado , University of Tsukuba
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00144536">http://hdl.handle.net/2241/00144536</a>

# 筑波大学附属坂戸高等学校のユネスコスクール実践史

## ～総合学科で育成するグローバル人材像～

地理歴史科 今野 良祐

筑波大学附属坂戸高等学校は、「総合学科の特色を生かした多角的アプローチによる ESD 実践」をテーマに 2011 年 2 月にユネスコスクールに加盟した。ユネスコスクールの柱としての ESD のうち、特に国際教育に注力しながら総合学科ならではの ESD・国際教育の実践に取り組んできた。2014 年度より文部科学省スーパーグローバルハイスクール (SGH) に指定され、さらに ESD・国際教育が充実する契機となった。本校のこれまでの ESD・国際教育をふりかえりつつ、総合学科ならではのグローバル人材像について考察する。

キーワード ユネスコスクール ESD 総合学科 グローバル人材 筑波大学附属坂戸高等学校

### 1. はじめに

ユネスコスクールは、ユネスコ憲章に示された理念を実現する学校として 1953 年に発足した。現在では世界各国にそのネットワークは展開し、世界 181 か国約 10,000 校の学校と協力・交流して地球規模の諸問題解決に向けての取り組みがなされている。取り組みの大きな柱として①地球規模の問題に対する国連システムの理解、②人権、民主主義の理解と促進、③異文化理解、④環境教育が掲げられている。そして、2005 年から始まった ESD (Education for Sustainable Development) の推進拠点としても位置付けられている。国内のユネスコスクールは 2008 年 1 月にわずか 24 校であったが、岡山でユネスコスクール世界大会が行われる 2014 年 10 月には 807 校まで加盟校が増加している。

筑波大学附属坂戸高等学校 (以下、本校と記す) は 2011 年 2 月にユネスコスクールに加盟し、総合学科高校の特色を生かした ESD 実践に取り組んできた。ESD の諸側面の中でも特に国際教育に注力し、国内外のネットワークを生かした多彩な活動を展開してきた。そして 2014 年からは文部科学省スーパーグローバルハイスクール (以下、SGH と記す) に指定され、ESD・国際教育をより一層充実させる契機となった。こうしたこれまでの取り組みは国連 DESD 最終年の 2014 年 11 月に岡山大学で開催されたユネスコスクール世界大会の場で、第 5 回 ESD 大賞高等学校賞受賞として結実した。

本稿では、ユネスコスクール加盟の経緯とこれまでの ESD 実践の取り組みを総括するとともに、これまでの実

践の蓄積から導出された総合学科高校で育成するグローバル人材像について考察を行う。

### 2. ユネスコスクール加盟の経緯

筑波大学の附属学校の 3 つの拠点構想 (先導的教育拠点、教師教育拠点、国際教育拠点) のうち、各附属学校で国際教育を組織的に推進していくため、2008 年に同局内に国際教育推進委員会が設置され、各学校からの委員によって組織されている。また、同名の校内組織 (校内名称は CIS : Committee of International Studies) を新設し、校内の国際教育の計画策定・運用を行っている (CIS の活動詳細は別稿を参照のこと)。同時期に校内では、学習指導要領改訂に伴う教育課程の改訂を検討し始めていた。この改訂に合わせて、国際教育をさらに充実させるために学校設定教科「国際科」の設置、高校生国際会議の実施、海外校外学習の複数箇所分散型への変更、そしてユネスコスクールへの加盟など CIS を中心に新たな取り組みを検討するようになった。ユネスコスクール加盟のメリット・目的としては、次の 3 点が挙げられる。

#### ① 国内外の学校との交流ネットワークの充実

国際教育を推進するうえで、海外の学校とのネットワークは欠かせないものである。本校ではこの時点ですでにインドネシア、タイ、台湾などの学校との国際交流を行っていたが、継続的かつ持続可能な社会づくりといった目的を共有する国際交流を実現するために、ユネスコスクールといった世界規模のネットワークに

参加することは有益であると考えた。加盟前当時はユネスコスクールへの加盟について、「同じ「国際」というキーワードのもとで、各校の特色や各地の地域性を生かした連携が可能となるという点で、本校の教育活動全般に還元できるチャンスであると捉えている」と期待を述べている（工藤ほか、2010）。世界的に高校段階の教育課程は、専門課程で編成されることが多く、ユネスコスクールによる国際ネットワークが形成されることで、専門分野を学んでいる高校生同士による学び合いの実現を期待した。昨年度よりユネスコスクールホームページ上に国内外の学校とのマッチングサイトが構築されているが、海外の学校の登録が進まず、マッチングがなかなか難しいようである。

## ② ESDの推進による総合学科教育の活性化

ユネスコスクールの活動の柱の一つとして、ESDが掲げられている。これは、ESDの世界的な推進組織（Lead Agency）に教育を司る国連機関であるユネスコが指定されたことによる。これだけでなく、ユネスコ憲章に示された教育理念の根本は平和な社会の構築であるが、広義の平和な社会とは持続可能性が確保された社会のことであり、つまりはESDが目指すところであるといえる。ESDは、持続可能な社会づくりの担い手育成が主眼であるためその内容は社会課題全般に多岐にわたり、開発問題や国際理解だけに留まらない。本校の専門教育分野に即して考えれば、循環型農業、環境保全や環境創造、ものづくり、情報技術、生活デザイン、福祉、異文化間コミュニケーション、自文化・異文化理解、社会経済理解などの総合学科の教育活動すべてがESDにあてはまる。もちろん、内容面だけでなく、思考力、判断力、コミュニケーション能力などのスキル面や多様性、公平性、協調性などの価値観などの育成も、長年キャリア教育で実践してきた総合学科高校としてはいずれも得意分野である。これがESDは総合学科との親和性が高いとされる由縁である。

## ③ ユネスコ活動やESDに関わる情報、または教材などの情報が提供されること

ユネスコスクールまたはESDに関する情報は、学校への郵送物のほか、ユネスコスクールホームページ上や校内担当者向けのメーリングリストによって提供される。たとえば、日本ユネスコ協会連盟主催の「教員研修会」や「ESD国際交流プログラム」、フルブライトジャパン（日米教育委員会）主催の「ESD日米教員

交流プログラム」および「日米青年交流プログラム」、大阪ASPnetが中心となって運営された「日韓中高生ESDフォーラム」へのスタッフ参加など教員・生徒向けの多種多様なイベントの案内があった。また、世界遺産を教材とした「守ろう！地球のたからもの」の提供、ユニクロ「服のチカラ・プロジェクト」やアジア6カ国でお米について学びあう「ESD Rice Project」への日本代表校としての参加の募集などの連携提案や教材の提供があった。提供された情報については、校内で共有し、いくつかのものについては本校も利用させていただくなどした。

2009年度途中から、新教育課程で開設する学校設定教科「国際科」の科目開発、さらに国際教育を充実させる契機としてのユネスコスクール加盟などの検討に入った。ユネスコスクールのとりまとめ係はCISの一つの役割として位置付けられることになった。2010年2月には関西方面と横浜方面の総合学科高校、ユネスコスクールおよび国際教育で実績のある高校の視察を行って、国際教育の実施形態やユネスコスクール加盟のメリットなどの情報を提供していただいた。その後、視察校の状況や校内での新教育課程の展開などを勘案したうえでCISで申請書の素案を作成し、英語科教員のサポートのもと申請書の英語版を作成し、2010年8月7日に日本ユネスコ国内委員会事務局へ申請書を提出した。ちょうど半年後の2011年2月8日にパリのユネスコ本部から正式に加盟認定が下され、本校は申請れてユネスコスクールの一員となった。申請と同時に体制づくりを進めていたものの、加盟決定後の2か月弱で急ピッチで実施体制を整えた。

## 3. 本校のこれまでのESD実践の総括

本校のユネスコスクールでは、全体の実践テーマを「総合学科の特色を生かした多角的アプローチによるESD実践」として、以下の3点を重点課題とした。

- ・総合学科特有の多様な教科目から、持続可能な社会づくりに向けてアプローチする
- ・ESDの視点から教科目の実践、さらに教科間連携や合科的な学習を推進する
- ・国内外の高校生と研究交流の機会を持ち、国際感覚を持ちながら学習を展開する

また、教育課程の改訂に伴って、学校の教育目標および科目群（系列）の目標に、「持続可能な社会の創造」または類似する文言を入れて、全校を挙げてのESD実践を行うこととされた。

〔教育目標〕（平成 23 年度入学生より）

普通教育及び専門教育を総合的に施すことによって、社会の変化に対応しながら生涯を通じて主体的に学び続ける資質や能力を身につけさせ、社会の進展や科学技術の進歩に対応し、持続可能な社会の創造とその発展に貢献できる人間を育成する。

〔選択科目群の名称と目標〕

1) 生物資源・環境科学

人間の生命の源である農や環境について理解を深めるとともに、地域的視野・地球的視野の双方から探求する活動を通じて、持続可能な地球環境の創造に主体的に取り組む態度を身につける。

2) 工学システム・情報科学

人間の知的な生産活動である「ものづくり」の体験や工学・情報技術を総合的かつ科学的に探究する活動を通じて、持続可能な社会をめざした環境にやさしい科学技術の発展に主体的に取り組む態度を身につける。

3) 生活・人間科学

人間生活の基盤となる衣食住及び福祉・保育などに関する基礎的・基本的な知識・技術を習得するとともに、現代社会の課題を科学的に理解し、持続可能な社会をめざしたライフスタイルの実践に主体的に取り組む態度を身につける。

4) 人文社会・コミュニケーション

社会のあり方やコミュニケーションに関する基礎的・基本的な知識・技術を習得するとともに、社会の持続可能な発展のために、グローバル社会における諸問題の解決に主体的に取り組む態度を身につける。

上記に示すように 2011 年度（平成 23 年度）入学生からの本校の教育目標および科目群（系列から名称変更）の目標には、それぞれ「持続可能な社会の創造」または類似する文言が入り、全校を挙げての ESD 実践が期待されている。ユネスコスクールの冠の下で、これまで本校が積み上げてきた各教科・科目または各科目群（系列）における持続可能な社会づくりにつながる教育実践を継続・発展させることが必要である。加えて、それらを別個の取り組みとしてバラバラにさせておくのではなく、「総合学科における ESD」として、別個の取り組みが ESD の名の下に収斂していくような場があることが望ましい。この点について現状では、3 年次で取り組む「卒業研究（課題研究）」が最適な場であると考えられる。教

科・科目の枠を超えて、自ら課題を見つけ、仮説を立てて調査や実験を重ね、考察し、最終的に論文にまとめ、その成果をプレゼンテーションする。研究の過程はゼミ形式で行われ、生徒や指導教員とのディスカッションを経て切磋琢磨しながら執筆活動を進める。そして全校生徒・教員が参加する卒業研究発表会や本校主催で毎年 2 月に実施している「総合学科研究大会」で研究の成果を発表している。こうした場では、他の生徒の学びが自分の学びに刺激を与えることになり、学びあいの場として重要な役割を持っている。

2014 年より文部科学省の「スーパーグローバルハイスクール（SGH）事業」の指定校に認定され、ますます卒業研究をはじめとする課題解決型の学びが重視されることとなった。本校では、2008 年より筑波大学農林技術センターと共同で取り組んだ「国際協力イニシアティブ事業」および 2010 年よりトヨタ財団の助成を受けて取り組んだ「アジア隣人プログラム」のなかで、インドネシアの高校と課題解決型の協働学習の機会を持つことができ、これらを契機として 2011 年 3 月の姉妹校締結への運びとなった。こうした年齢や分野を超えた学びあいを校内や国内だけで留めるのではなく、いずれはユネスコスクールや海外姉妹校などのネットワークを生かして、課題解決型の国際協働学習や国内外の高校生を招聘しての「高校生国際会議」を本校主催で実施できればとその術を模索していた。そこで学内の競争的資金を獲得して予算を確保し、2012 年より「高校生国際 ESD シンポジウム」をここ 3 年間開催するに至っている。インドネシア、タイ、フィリピン、そして台湾の姉妹校や交流実績のある高校からを生徒・教員を招へいして実施している。シンポジウムのテーマは 2012 年は「環境問題」、2013 年は「持続可能な社会づくりのために高校生ができること」、2014 年は「アジアの食と環境」とした。また、筑波大学農林技術センター主催の「国際農学 ESD シンポジウム」の時期に合わせて開催し、参加の高校生が国内外の研究者に対してプレゼンできる場としている。また、海外から招へいするだけでなく、相互訪問が可能なのというところで 2013 年より「分散型海外校外学習（修学旅行）」の実施となり、姉妹校のあるインドネシア、台湾など 3 か所に分かれて、現地の高校へ訪問し、交流とともに課題解決型の協働学習を行うことを盛り込んだ（今野ほか、2014）。

SGH の指定を受けた 2014 年からは新たな取り組みとして、3 週間インドネシアに滞在して課題解決型の協働学習を行う「国際フィールドワーク」や生徒国際委員会

の組織化なども行われた。また、アジアにおける ESD のフラッグシッププロジェクトとしてお米を素材とした国際協働学習の「ESD Rice Project」への日本代表校としての参加も決まり、総合学科の特色を生かして多様な教科・科目からの多角的なアプローチによる ESD 実践ができた。以上のような、これまでの ESD 実践に関わる取り組みをまとめたのが巻末の資料 1 である。また、第 1 表に示すように基本的には、2011 年のユネスコスクール加盟前から取り組んでいた ESD 的实践を ESD 実践として昇華させて継続しているものが多いが、ユネスコスクール加盟や SGH などの指定をいただいたことによって、ESD に関する情報提供や SGH による活動予算の充実などが、さらなる ESD 実践の発展に寄与していることがわかる。

第 1 表 ユネスコスクール加盟前後の ESD・国際教育

主な取り組み(抜粋)	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
運営組織	国際教育推進委員会(CIS)							
	ユネスコスクール加盟							
	文部科学省SGH指定							
海外渡航	海外校外学習							
	国際的視野に立った卒業研究支援プログラム							
	長期留学生の派遣							
海外生徒・教員受入	海外教員訪問団受け入れ							
	短期留学生の受け入れ							
	長期留学生の受け入れ							
	ホストファミリーバンク							
国際交流プログラム	国際協力イニシアティブ事業							
	アジア隣人プログラム							
	インドネシアの高校と姉妹校締結							
	高校生国際ESDシンポジウム							
	生徒国際委員会(有志組織)							
	国際フィールドワーク(インドネシア)							
授業レベルでの取り組み	各授業におけるESD実践							
	学校設定教科「国際科」の開設							
	イングリッシュ・キャンプ							
	森の聞き書き							
	ユニクロ「服のチカラプロジェクト」参加							
	ESD Rice Project							

※国名略称 印=インドネシア、米=アメリカ、豪=オーストラリア、中=中国、韓=韓国、白=ベルギー、紐=ニュージーランド

先述した本校での ESD 実践の特徴は、教科・科目・分野横断型であること、課題解決型であること、国際協働型であること、生徒参加型であることが挙げられ、総合学科の特色を生かしての実践であることがわかる。「総合学科について(第四次報告)」において総合学科の教育の特色について、「生徒の個性を生かした主体的な選択や

実践的・体験的な学習を重視し、多様な能力・適正等に対応した柔軟な教育を行うことを可能にする必要がある」としており、見学、実習、調査研究、発表、対話、討論、聴講などの学習方法や個別学習、グループ学習など多様で弾力的な授業形態が例示されている。一方、ESD 国内実施計画(2006)では、ESD の学び方・教え方について、「参加体験型の学習方法や合意形成の手法」や「仕事や活動の現場で、必要な知識や技能を習得させるオンザジョブ・トレーニング(on-the-job training)により、具体的な実践を通じて学ぶという方法」を推奨している。総合学科と ESD は、教育の内容・領域、方法・学び方、育みたい力・価値観など共通する事項が多い(今野, 2014)。その意味では、総合学科の教育実践を行うことが、それ即ち ESD 実践と言うこともできる。さらに SGH の指定を受けて、従来の ESD・国際教育実践にグローバル人材の育成というベクトルが加わり、総合学科ならではのグローバル人材育成に向けた新たな胎動がいま始まったところである。

#### 4. 総合学科で育成するグローバル人材像の考察

昨今、声高に叫ばれているグローバル人材の育成は、新しい概念ではなく類似する概念はこれまでに登場していた。すなわち「国際人」という概念であり、1990年代のバブル崩壊後の失われた 10 年と称される危機的状況と加速する日本国内の国際化を受けて登場したものであった(藤山, 2012)。それから 20 年経った 2010 年代になると、グローバル化や高度情報化社会と呼ばれる現象が世界を覆いつくし、ヒト・モノ・カネがボーダレスに動き回る社会となった。また、中国の経済大国化や ASEAN 諸国の成長などによって、かつて日本が築いたアジアの雄の地位が揺らいでいる。こうした国内外の環境の時代的变化を受けて、国際的に活躍できる人材としてのグローバル人材に注目が集まることとなった。産学連携によるグローバル人材育成推進会議(2011)は、グローバル人材の定義を「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人」とした。翌年、グローバル人材育成推進会議(2012)は、グローバル人材の要素として、要素Ⅰ：語学力、コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命

感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ、などの3つの要素を掲げた。また同年、文部科学省主催の産学協働人材育成円卓会議（2012）では、①グローバルな世界を舞台に活躍できるタフネス、②多様な民族、宗教、価値観、文化に対する理解や適応力、③日本人としてのアイデンティティをベースとしたグローバルな感覚・視点、④異質な集団の中で、自分の考えを適切に主張し、他者と協働し、能力を発揮できること、⑤主体的な思考力・行動力、リーダーシップ、⑥高い語学力・コミュニケーション能力、などの6点をグローバル人材に必要な素養としてまとめた。このようにグローバル人材の定義は様々な立場から行われている。

しかし、ここで挙げられている資質・能力の多くは、これまでの教育論議の中ですでにその必要性が指摘されているものと重複する。たとえば、生きる力（中教審答申、1996）を皮切りに、人間力（内閣府、2003）、就職基礎能力（厚生労働省、2004）、社会人基礎力（経済産業省、2006）、学士力（文部科学省、2008）などの資質・能力が2000年代初頭に各省庁から相次いで提示されている。また、キー・コンピテンシー（OECD、2005）、キャリア教育を通して育成すべき基礎的・汎用的能力（国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター、2011）、21世紀型能力（国立教育政策研究所、2013）、社会を生き抜く力（育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会、2014）など学生・生徒に求められる資質・能力については枚挙にいとまがない。本田（2005）は、これらの資質・能力を「ポスト近代型能力」と定義したうえで、抽象的で尺度のはっきりしない資質・能力でありながら、学校教育や社会生活においてその価値が高まっている風潮に警鐘を鳴らしていた。しかし、この指摘の後も先述のような「新しい能力」（松下、2010）の出現は止まらない。加速する国際化・グローバル化した社会が要請している資質・能力は、それまでに蓄積されてきた「ポスト近代型能力」と合致し、2010年代になってグローバル人材の定義として整理されたのである。総合学科教育やESDにおいては、どちらかと言えば、これらの「ポスト近代型能力」の育成に力点を置いてきた経緯があり、その意味では今後も従来通りグローバル人材の育成に資する有用な教育システムであると言える。ただ、知識経済を生き抜く「グローバル人材」を目指すのか、経済成長がもたらす社会問題や環境問題などに「自分ごと」として取り組む「地球市民」を目指すのかによって、資質・能力やコンピテンシーの中身が大きく変わってくる（石井、2015）。総合学科の本校の場

合は、先述の「グローバル人材」および「地球市民」の折衷もしくは両面を兼ね備えた人材の育成が可能であり、そうした点で「総合学科ならではのグローバル人材の育成」に向けたプログラムの開発と実践にチャレンジしていきたい。

#### 【参考・引用文献】

- 石井英真（2015）. 今求められる学力と学びとは—コンピテンシー・ベースのカリキュラムの光と影—. 78p. 日本標準
- 勝野頼彦研究代表（2013）. 「教育課程編成の基礎的研究報告書5 社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則」. 101p. 国立教育政策研究所.
- 工藤泰三ほか（2010）. 平成21年度国際教育推進委員会活動報告. 「研究紀要」第47集、pp.61-68. 筑波大学附属坂戸高等学校.
- グローバル人材育成推進会議（2012）. 「審議のまとめ」. 44p. 内閣官房副長官補室.
- 高等学校教育の改革の推進に関する会議（1993）. 「総合学科について(第四次報告)」.
- 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議（2006）: 『我が国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画』、24p.
- 今野良祐（2014）. 「総合学科」とESDの接点を探る—教育制度・制度的枠組みの検討から—. 「研究紀要」第51集、pp.99-105. 筑波大学附属坂戸高等学校.
- 今野良祐ほか（2014）. 海外校外学習（修学旅行）の3か所への分散実施の取り組み. 「研究紀要」第51集、pp.59-67. 筑波大学附属坂戸高等学校.
- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議（2011）. 産学官によるグローバル人材の育成のための戦略. 55p. 文部科学省.
- 産学協働人材育成円卓会議（2012）. アクションプラン～本復興・復活のために～. 14p. 文部科学省.
- 松下佳代編著（2010）. 「新しい能力は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー—. 319p. ミネルヴァ書房.
- 藤山一郎（2012）. 日本における人材育成をめぐる産官学関係の変容：「国際人」と「グローバル人材」を中心に. 立命館国際地域研究36. pp. 125-142.
- 本田由紀（2005）. 「多元化する「能力」と日本社会—ハイパー・メリトクラシー化のなかで—. 286p. NTT出版.

【資料1】 筑坂ユネスコスクール・ESD 実践 これまでの軌跡（抜粋）

2010年8月7日	ユネスコスクール加盟申請書 日本ユネスコ国内員会（Natcom）に提出 書類は Natcom を経由して、パリのユネスコ本部へ。
2011年2月8日	ユネスコスクール加盟認可 パリ本部から加盟認定書が届く。
2011年3月14日	ボゴール農科大学附属コルニタ高校と姉妹校提携
2012年3月	ESD 国際交流プログラム（日ユ協、MUFJ 主催）に生徒参加…パリ・ドイツ訪問
2012年3月	ESD 日米青年交流プログラム（フルブライトジャパン主催）に生徒参加
2012年6月	東アジアグリーンスクールネットワークに関する会議で教員発表 （インドネシア政府、ユネスコジャカルタ、KOICA（韓国国際開発機構）主催）
2012年7月	3年生2名が姉妹校コルニタ高校に1年留学へ
2012年10月	高校生国際 ESD シンポジウム（第1回）開催（坂戸+つくば）
2012年11月	国際ユース作文コンテスト（五井平和財団・ユネスコ共催）で生徒入賞
2012年11月	ユネスコスクール地域交流会 in 関東にて教員発表
2012年12月	2年次海外校外学習実施（オーストラリア）
2012年12月	アジアの高校生のための聞き書きプロジェクト in インドネシアで生徒・教員渡航
2013年1月	日韓中高生 ESD フォーラムに生徒・教員が運営スタッフとして参加
2013年3月	筑波大学学長表彰受賞「海外大学間交流協定校ネットワークを活用したグローバル人材育成事業」
2013年5月	東アジアグリーンスクールネットワークに関する会議 教員発表
2013年8月	国際ソロプチミストアメリカ 第8回日本東リジョン・ユース・フォーラムに生徒出場
2013年9月	Uniqlo「服のチカラ・プロジェクト」54箱2000着以上の服を校内で回収・発送
2013年10月	高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸2013（第2回）開催（坂戸+茗荷谷）
2013年11月	国際ユース作文コンテスト（五井平和財団・ユネスコ共催）で生徒入賞
2013年12月	2年次海外校外学習 分散実施（オーストラリア、台湾、インドネシア）
2013年12月	ESD Rice Project ワークショップ in アユタヤ（ACCU 主催）に教員参加
2014年1月1日	「日本教育新聞」に本校の ESD の取り組み記事が掲載
2014年4月	文部科学省スーパーグローバルハイスクール（SGH）指定
2014年7月	2年生1名がNZへ、3年生2名が姉妹校コルニタ高校・ベルギーに1年留学へ
2014年8月	国際フィールドワーク（インドネシア）、国際フィールドワーク入門（黒姫）実施
2014年8月	「月刊高校教育」に本校の ESD の取り組みの記事が掲載
2014年8月	広島県高等学校教育研究会総合的な学習の時間部会にて ESD 講演
2014年8月	ユネスコスクール研修会@岡山にて実践発表、分科会講師
2014年9月	ESD Rice Project ワークショップ in マラン（ACCU 主催）に教員参加
2014年9月	ESD Japan レポート（文部科学省発行）に本校の実践事例が掲載
2014年11月	ユネスコスクール世界大会にて教員分科会発表、ポスター発表
2014年11月	第5回 ESD 大賞高等学校賞 受賞！
2014年11月	本校の取り組みが ESD 実践事例集掲載！（日本・世界の ESD 関係者に配布）
2014年11月	高校生国際 ESD シンポジウム@坂戸2014開催（坂戸+茗荷谷+つくば）
2014年12月	2年次海外校外学習 分散実施（オーストラリア、台湾、インドネシア）
2015年1月	「初等教育資料」に本校のユネスコスクールの記事が掲載
2015年1月	筑波大学 AIMS プログラムの留学生38名が来校して1年生とディスカッション
2015年2月	「革新的教育P」で生徒2名・大学院生1名・教員1名がタイ渡航
2015年2月	「国際的な視野に立った卒業研究支援P」で生徒2名・教員1名がドイツ渡航

2015年2月	第1回SGH研究大会開催（第18回総合学科研究大会と併催）
2015年2月	コルニタ高校生徒2名、教員1名、林業省附属高校生徒2名、教員1名来校。 SGH研究大会で国際フィールドワークの成果を本校の生徒と共同発表
2015年2月	SGH第1年次報告書、ESD Rice Project 実践報告書完成、研究大会で配布
2015年2月	教員2名がSGH課題研究視察でバンクーバーに渡航
2015年2月	JICA エッセイコンテスト学校賞受賞
2015年3月	SGHバンクーバー課題研究で教員2名生徒5名がカナダに渡航
2015年3月	SGH国際フィールドワーク「インドネシア・ボゴールリーダー会議」 教員2名、生徒2名渡航、インドネシア政府およびユネスコ国内委員会で協議
2015年3月	ASEAN 課題研究で教員2名、生徒2名がラオスに渡航
2015年3月	筑波大学大学院生（インドネシア人留学生）によるインドネシア語講座開講
2015年3月	福島県のBritish HillsにてEnglish Camp実施（1・2年次生希望者）